
弥鷹勘助珍道日記

設楽牛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弥鷹勘助珍道日記

【Nコード】

N2601U

【作者名】

設楽牛

【あらすじ】

呪われた刀の封印を解き、放たれた百の魔物を退治する為に奔走する侍。世界に散らばる秘宝を求めて跳梁跋扈する盗賊。心理を求めて津々浦々を旅する学者など――この世の中には、人の数だけ物語が存在する。そしてここに、それらの物語を一つに纏め上げることになる（かもしれない）平々凡々とは真逆の意味で遥かに遠ざかった性質の、なんとも情けない男が居た。

これは彼、弥鷹勘助が生きていく上で細々と受難や成長を繰り返す、そんなお話になる予定である。

「挨拶（前書き）」

（長くなったのでこちらに掲載させていただきます。読まなくとも特に支障は無いかと思われます）

初めまして。この度から貴重なスペースをお借りしてこの弥鷹勘助珍道日記を執筆させて頂きます、筆者でございます。

まず、退屈で瑣末な日常の要素を一切排除した純粹な空想の産物であるべき物語に裏方が顔を出すという行為を深くお詫び申し上げます。

さて、では早速、私がどうして冒頭からわざわざこのような無粋で行き過ぎた真似をしでかしてしまったのかを説明させていただきますと思います。

実はこの物語、連載の前に私の中で散々悩んだ挙句、「ファンタジー」というカテゴリで始めさせてもらおうと決めたのですが。

やはり、選択を迷うからにはそれなりの理由がございます、世界観が非常に適当かつ曖昧なのでございます。

もちろんそれは、筆者がろくな考えも練らず行き当たりばつたりな話を自ら進んで書くこうとしている、というような意味ではございません。

何と説明しようか、まず、このお話をご覧になる皆様方は本編開始時の雰囲気から「これは時代小説なのではないか？」という疑念を抱かれると思います。

しかし当然、このお話を構想し、最終的に「ファンタジー」という括りを選んだ筆者に一切そのつもりはございません。

敢えて言うならば「和風ファンタジー」とでも申しましょうか、この言葉でおよそのイメージが沸くというのなら話は早いのですが、筆者も含めておそらく、このように唐突なことを言われても呆気にとられるだけでございましょう。

ですのでもつと踏み込んだものにしましょう。「和服を着て刀を持った人々が古っぱい建物で暮らす世界で起こった色々なお話」。これならばどうでしょうか。

はい。このくどくどと言いつつ詰み話しかからお察しできるように、実は筆者、日本史についてはほとほと疎いのでございます。

ですから実際の歴史と照らし合わせてお話を進めようとする、とても早い段階で行き詰ることが目に見えております。

しかしこの貧困な想像力が生み出したキャラクター達には、どうにもこういつた「和」っぱい雰囲気似合う。

そうして逡巡した挙句、半ばやけくそになりながら生み出したジヤナルというのが、私が言うところの「和風ファンタジー」なのでございます。

江戸のような情景を示唆する描写をすれば、すぐにこれを時代小説だと結びつける方も多くおりました。

しかし、ここではあくまで「のような」の部分にこだわってもらいたいのでございます。

こういつた体を取らせていただく以上、何の説明もなく話を進めたのでは。

「ファンタジーなのに剣も魔法も竜も出てこないじゃないか！」といったご意見や（刀は出ますが）。

「この時代にそんな地名も無いし、建物の名称だって一々おかしい！」というような意見が出てくるかも分かりません。

ですが、これはあくまで「和風ファンタジー」。筆者によって作られた「江戸に似た世界観」なのでございます。

もちろんだからと言って、実物に近づけた描写の方が皆様も想像し易いだろうということは自明の理、筆者も拙い知識なりになるべく気をつかって進めたいと思っております。

表現に引つ掛かりを覚えた方、不満を抱いた方は遠慮なく意見して下さい。謹んで、参考にさせていただきたく存じます。

それでは、そろそろ皆様もくどくと長つたらしい戯言に飽きて

くる頃合いでございます。挨拶もほどほどに、幕を開かせていただきます。

弥鷹勘助珍道日記第一話、『弥鷹勘助、山を下りる』。

始まり始まり、でございます——。

弥鷹勘助、山を下りる

「『お金』？ お金ってなんですかあ」

「何を言ってるんだいこのすつとこどっこい。物が欲しけりやその分
銭を出すのは当たり前だろうが。ほら、さつさと十文払いな。そし
たら野菜でも果物でも好きなのっただけ持っておいきよ」

八百屋と書かれた看板の下で、若者と老婆が問答していた。

「よく分からないのですが、拙者はとても腹が減っているのです。
山を下りてきたばかりなのです。どうか、その人參を拙者にわけて
ください」

「あんたも分からない奴だね。うちで大事に育てたこいつを、金も
持っていない奴にくれてやる義理なんかこれっぽっちも無いんだよ！」
「ひいひい」

ここまで募らせた苛立ちを吐き出すように怒鳴る老婆の口から唾
が飛んだ。

若者は情けない声を上げ泣きそうな表情を浮かべながら、一步あ
とずさる。

——そこで、恨めしいものでも見るような眼で若者を睨んでいた
老婆の顔が若干ながら変化した。

「おや……あんた、お侍さんかい？」

老婆は若者の腰にささった刀を見て、そう言った。
しかし、対する若者はこれまたとぼけた顔をして。

「お侍さんって、何ですかあ」
と言う。

老婆は一瞬だけ怪訝な表情をした。そしてすぐ、呆れたように、
困ったように息を吐くと。

——徐々に、その皺だらけの口と眉尻を歪めて。

「金が無いなら仕方ない。けどね坊や、もしあんたの腰のソイツと交換するってんなら、この人參をくれてやらないこともないよ」

「ええ！ 駄目ですよ」

老婆の企みに対する若者の反応は――これまでのどの会話の時よりも、早かった。

「これは絶対に駄目です。死んだお爺さんが拙者に持つて行けと言ったのです。誰にもあげちゃいけないものなのです。駄目ですよ」

「ああ、そうかいそうかい！ ならあんたに客の資格はないよ。とつとアタシの視界から消えとくれ！」

その不細工な面なんかこれ以上拝みたくもないよ、と老婆はこれまでで一番の迫力でもって若者を捲し立てた。

若者は再びひいい、と情けない悲鳴を上げると、八百屋に背を向けながら不器用な駆け足でもって去って行った。

「つたく、今のは一体なんなんだい……」

若者の姿が見えなくなつたことを確認すると、老婆はねえと声を掛けながら首を回した。

「八千穂ちゃんも、そう思うだろ？」

「ええ」

今現在老婆の視線の先に立ち、そして先程のやり取りを傍で見守っていた女性。

子作りで整った顔。艶やかな黒髪を背中まで伸ばし、どこか儚さを感じさせる、細くしなやかな柳のような物腰。そして、その全体的な雰囲気とは対照的な、意志の強そうな瞳。

身に纏った地味で質素な着物が、その素朴さを際立てていた。

八千穂と呼ばれた彼女は、店頭に並んだ品物を見定めながら。

「役人にしては身なりが汚いし、浪人かと思ったけどそういうわけでもないみたいだし」

「大体、こんな辺鄙な場所にわざわざ足を運ぶ浪人なんかいやしいよ。何かを取ろうにも、なーんにも残っちゃいないんだから」

あら、このお品物があるでしょう、と八千穂が言うと、よしとく

れと老婆が手を振った。

「ここんところもつずっと、村に活気が無くなっちゃったから。ただでさえろくに売れてやしないのに、そこらの若造にタダで奉仕するなんてのはごめんだよ」

「でも、悪い人では無さそうだったよね」

検討をつけ終えたのか、八千穂は老婆に面と向かって語りかけていた。

しかし、老婆は八千穂の言葉を真つ直ぐには受け取らず、けつ、と毒づいてから。

「こんな村に、一々目くじらを立てなきゃならないほどの悪人なんざ来ないよ。雷河内らごうちの馬鹿領主ばかりやうしゅに比べたら、どいつもこいつも可愛いもんだ」

と言った。

弥鷹勘助――。

先刻、八百屋の店主と大揉めした（と言ってもひどく一方的なものではあったが）若者の、名前である。

濃い緑色をした着物を纏い、顔の作りは老婆が言った――ほど酷くはないが、決して褒められたものでもない。

その面相は、眉の大きさも、鼻の高さも、唇の厚さも、何もかもが中途半端。逆に奇跡的とも言えるほど、突出した部分が無いのである。そういった点で見れば、均整が取れている、と言えないこともない。

しかし最終的には、常に眠たげな半開きの眼が、その容貌に間抜け面という印象を抱かせてしまうのだった。

そして、そんな顔の作りに対して髪のみだけは一丁前に首元まで伸ばしているという、何とも意図の掴みづらい部分もあったりする。

老婆にも指摘された脇にさした刀の数は、二本である。

片方は小太刀程度の大きさで、それらを同じ位置に重ねてさしているのだ。

二本の刀はそれぞれの鞘に複雑な模様が彫られており、更にその鞘の上を細かく編まれた古びた縄のようなものが覆っていた。

何やらいかにも意味ありげな装飾だと思われるのだが、所有者である弥鷹勘助はそれを気にする素振りを一切見せない。

と言つても実は、勘助がこれを譲り受けてからまだ数時間ほどしか経っていないということもあり、じっくり考察するほどの余裕が無いだけだったとも言えるが――。

いや。

違つのである。

先程のやり取りから大凡推測できる通り――この弥鷹勘助と言う男、俗に『馬鹿』と呼ばれるに相応しい性質を兼ね備えているのだ。その理由としてまず、この世に生を受けてから十六年の間を山中でのみ過ごしてきたということが挙げられる。

彼の言うところの『お爺さま』に育てられてきた勘助は、育て親が死に、山を下りることになるまで、『世間』というものと関わった経験が無いのであった。

だから、いわゆる常識というものがこの男の中には備わっていない。商品売買物々取引の概念も知らなければ、自分が周りからどう見られているかということに対する認識も無いのである。

他にも、文字の読み書きができなかつたりだとか、右や左という言葉を使われても分からないなどと、列举すればきりが無いほどの欠点があるのだが。

それらは追々、物語の中で明かされていくだろうから、ここではあまり触れないことにしよう。

次に、これはおそらく育ち方とは関わりのないところでの話だが、この弥鷹勘助、生まれながらにして『退屈』を何とも思わない男だった。

多くの人は、知識を蓄えたり知恵を身につけたり或いは肉体的能力

の向上を図ったりする際に、その成長の糧として『好奇心』というものを備えていると思う。

そしてその好奇心というものは、大概にして慢性的な環境に新たな刺激を求めようとする心——いわゆる、退屈からの脱却を望む形で生まれてくるものだと考えられる。

故に、もしも、周囲を森に囲まれその全く面白味のない無味乾燥な日常をそのまま享受できてしまうような人間がいたとしたら。

かつ、そのような態度を取りつつ何の支障もなく毎日を過ごせるような環境にあるような人間がいたとしたら。

その人間に、成長などというものは見込めない。

弥鷹勘助は、実に、まさに、直球ど真ん中で、そういう類の男だった。

つまり、これまで説明してきた弥鷹勘助の特徴というものを簡潔にまとめてみると。

平々凡々の間抜けそうな顔をした。

常識のない。

それでいて向上心もない。

——更に、嫌だと思ったことは嫌だとはつきり言う。

そんな男だ、ということになる。

そう——この男、普通にしている人間社会についていけないため、周りに迷惑をかけながら、謝罪と反省を繰り返して生きていかねばならぬという運命におかれたにも関わらず。

目前に提示された気に入らない条件を拒否することに関しては一丁前なのである。

自分の主張を頑なに曲げず、要領の得ない問答を繰り返したくせに。

嫌という言葉を使うだけ、その口調は迅速かつ一刀両断の流暢さ。

老婆も憤慨するというものである。

——さて、この弥鷹勘助という男が社会的にも個人としてもいかに愚鈍な存在か、大体のことは承知いただけたと思う。

そしてついでに、何を隠そう件の愚か者こそが、この物語の主人公なのだということも了承していただきたい。

何も知らない弥鷹勘助が初めて世間を目の当たりにし、どのような影響を受け、そして世間というものにどのような影響を与えていくのか。

この物語は、そうしたものを綴っていく予定である。

とても拭いきれぬ不安をお持ちであることを承知で、どうか、最後まで見守っていただきたい所存である。

八百屋を追い出された勘助は、さつきから気味の悪い音で自己主張を続けている腹を抱えながら、当てもなく村の中をさまよっていた。

勘助の育った山の麓から、徒歩で数時間、つまり一番近かった集落というのが、この名もなき村であったのだが。

——まだ日も明るい時刻だというのに、往来を歩く人は疎らだった。

当然人同士の喋り声が聞こえるはずもなければ、売物屋の宣伝の声もない。

荒んだ風が奏でるもの寂しい音だけが響き渡り、村全体の雰囲気は陰鬱としたものだった。

——が、勘助はそんなことを気にしない。彼が憂慮するのは、あくまで己の腹のことだけである。

第一、華々しい雰囲気などというものも知らない彼であるから比較することもできず、比較することができないなら村に対してこれといった感想を持たないのも、当然と言えば当然であった。

問題なのはやはり、時間をかけて弱っていく一方の身体なのだ。

どうやらこの村の人たちはお爺さんとは違い、お金というものを持つていなければ食料を与えてくれないのだという。

（お金……お金……）

すれ違った人にお金をくださいと尋ねてみたところ、ふざけるんじゃないかと大きな声で一蹴されてしまった。

食料をもらうにはお金が必要で、じゃあお金をもらうには……。人にもらうわけにもいかなくて。

（どうしよう……）

身体の危機は生命の危機。命に危険を感じれば、柄にないことでも懸命にするのである。

無い頭でもって考えにふけていた勘助の鼻腔を不意に、何やら妙な感覚がくすぐった。

「ん？」

それは、世間一般にはいわゆる甘い香りと呼ばれるものだったが、しかし勘助の語彙には彼の鼻を感じ取ったどこか心地よい違和感を表現できる言葉が存在しない。

せいぜい——なんか、いい匂い。という程度だった。

「なんか、いい匂いです」

自然と、勘助の足はその匂いに惹かれるようにして動いていた。歩を進める内に、甘味処の看板を掲げる店に辿り着く。

勘助は字が読めないし、読めたところで意味を汲み取ることも期待できないだろう。なので行動のほとんどを動物的な勘に委ねていた。

勘助は、古びた横開きの扉を開けた。

「おお、いらつしやい」

座敷の広がった空間の奥から、野太い声が響いた。

「あの、すみません」

「何だよ。変な奴だな」

「お腹が空いてしまったので、何か食べさせて欲しいのです」

なんだよ勿体付けた言い方しやがって、と野太い声は大きく笑った。

「要するに客ってことじゃねえか。いいぜ何にする。団子か、餡蜜

か、それとも……」

「じゃ、じゃあだんご……」

種類を並べられても何が何やらさっぱり分からない。とりあえず、最初に言われていたものを復唱しておいた。

あいよ、ちよつと外で待つてな、と威勢の良い返事がしたので、勘助は扉を閉めて店の前に置いてある長椅子に座った。

よかった、この人は普通に食べさせてくれるみたいだ。

じゃあさっきの老婆は一体なんだったのだろう……などと、簡単なことを考えているうちに。

串に刺さった色鮮やかな団子が皿に乗って運ばれてきた。

勘助は何を思ふ間もなくソレに手を伸ばし、ちょこちょこ角度を変えながら不思議そうに眺めまわした後。

遂に、その口へと運んだ。

「……おいしいです！」

経験したことの無い味だったが、その甘みと歯応えは勘助の舌にすぐ馴染んだ。

あつという間に全てを平らげると、流石に満腹とまではいかなかったが、それでもさっきまでの枯れそうな状態からは幾分かましになった。

そして。

ありがとうございました、と妙に力強い発音で礼をしてから、その場を立ち去ろうとした勘助の袖を。

「ちよつと待て。お勘定」

店主が掴んで、呼び止めた。

熊のように恰幅の良い、口周りに髭を生やした強面の男性である。
「おかんじょうって、何ですかあ」

「何を言つてやがる。てめえ、今までもな、こんな堂々と食い逃げする奴は流石の俺も見たことねえぞ」

「くいにげって」

「泥棒ってことだよ。団子泥棒」

勘助の言葉に被せるようにして、店主がそう言い切った。

そして、貧困な知識しか持たない勘助でも、どうやらその言葉の持つ意味は理解できたらしく。

「ひええ！ ど、泥棒って、泥棒って悪い人のことじゃないですか。拙者、泥棒じゃないですよ」

「金払わねえで行っちまったらそりやどっからどうみても泥棒だろうが。いいから支払え、十文」

またお金ですかあ、と勘助が素っ頓狂な声を上げた。

「だって、何か食べさせて欲しいっていったら、いいぜって言ったじゃないですか。だから……」

「そりやおめえ、客としてだよ。あの状況なら誰だって客だっと思うよ。タダで食いてえならハナからそう言えよ。ぶん殴って追い出してやったのによ」

「騙したんですかあ！」

「だから騙しちやいねえだろ！ おめえ話ちゃんと聞いてたか！？」さて、結果として双方の勘違いが生んでしまったこの状況であるが、この場合社会的な落ち度があるのは間違いなく勘助である。

甘味処の主人が入る客に「食い逃げですかい」と尋ねている光景は面白いと言えなくも無いが、本来ならばそんなことをする必要も責任も無いからだ。

つまりここは、常識の欠落、暗黙の取り決めに知らないということとは、しばしばこういう事態を招くものとして。

勘助には投獄ついでに勉強してもらい一件落着——という形で収めるのが普通の結末なのだが。

「あたしが払うよ」

ん？ といつの間にか掴んでる部位が胸倉まで昇っていた店主が、声のした方に振り向いた。

「八千穂ちゃん……」

「その人、さつきも会ったんだけど、本当に悪気はないと思うんだ。だからさ、ちょっと見逃してあげてよ。代金はあたしが肩代わりす

るから」

「いや、でも八千穂ちゃん。おめえん家は……」

そう言われると、八千穂は表情に僅かな影を落しながら、首を横に振った。

「いいんだよ。どうせ、『徴収』にはもう間に合わないから。逆に言えば、だからこそ人助けする余裕ができたつてところかな」

「おめえんところだけで足りねえんだつたら村の奴らだつて協力するさ。だから八千穂ちゃん、早まっちゃ」

「いいんだつて」

八千穂は笑みを浮かべていた。

「うちはうち、よそはよそ。けじめはちゃんとつけなきゃね」

「八千穂ちゃん……」

「うう……」

蛙を潰した時のような呻き声が聞こえた。

「苦しいの、です……」

話から完全に置いてかれていた勘助はその間、店主による呼吸器官の圧迫にひたすら耐え続けていた。

そして、二人が驚いて目を見開き、店主が慌てて手を放したの間に合わず、勘助の意識はそのまま暗闇に溶けてしまった。

「起きたか」

「はあ……」

気を失った勘助は、そのまま甘味処の長椅子に寝かされていたらしい。

ぼんやりとした視界が明瞭になり、店主の顔を見ると、どこか目の辺りが腫れぼったくなっている気がしたが、勘助は特に気にしなかった。

「おめえの分の銭は、八千穂ちゃんが払ってくれたよ。ったく、本

当にあの娘の覚悟には頭が下がるぜ……」

店主はぐひつ、と奇妙な声を出しながら目元を拭う仕草をした。
勘助は――。

「じゃあ、拙者はもう泥棒じゃないってことですかあ」

店主の周囲に漂う雰囲気など意にも介さず、極めて能天気なことを平然と言つてのけた。

「なら、拙者はこれでおいとまします……」

「ちよつと待て」

再び。

がつしりと、袖の部分を拘束されている。

「てめえの不始末を女に尻拭いさせといて、そのままとんずらつてのはいただけないぜ。そうだろ？」

「ちゃんとお礼も言いますよう」

泣きそうな声になっている。

「銭は要らねえ。だが、その分働け。八千穂ちゃんの誠意に報いてやんな」

「そんなあ」

「いかにもトロそうなおめえでも、皿洗いくらいはできんだろ」

すると、掴まれた袖が強引に引っ張られ、勘助はひええ、と情けない声を上げながら。

甘味処の扉の中へと、消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2601u/>

弥鷹勘助珍道日記

2011年6月22日05時10分発行